

令和元年度 第1回加古川市総合教育会議 議事要旨

- 1 開催日 令和元年8月28日(水)
- 2 開催場所 加古川市役所新館10階 大会議室
- 3 出席者 加古川市長 岡田 康裕
教育長 小南 克己
教育委員 吉田 実盛
教育委員 播 稷治
教育委員 坂元 裕美子
教育委員 廣岡 徹

4 傍聴人 5人

5 議事の要旨

○ 開会 午後1時30分

○ 会議公開の可否決定のこと
全ての議事を公開することに決定

○ 議事録署名委員指名のこと
小南教育長を指名

(傍聴人入室)

○岡田市長あいさつ

○ 協議事項

(1) 加古川市いじめ防止対策改善基本5か年計画に基づく命を大切にする教育の推進について

・教育委員会事務局より説明

(岡田市長)

- ・平成28年に発生した痛ましい事案を二度と繰り返してはならない、という強い思いの中、「いじめ防止対策改善基本5か年計画」に基づく取組を開始して1年が経過した。
- ・5年間という計画期間はあるものの、毎年の改善が必要と考える。
- ・平成30年度は、いじめの認知件数が平成29年度の290件から676件と増加している。事案発生前の27年度は全国的にも認知件数が少ない状況だったように思うが、事案が発生する前の時期、具体的な取組が始まる前と比較すると、認知件数はどのくらい増加しているのか。

(小南教育長)

- ・事案発生前の平成 27 年度は小学校 10 件、中学校 13 件の計 23 件。平成 28 年度上半期は小学校 8 件、中学校 19 件の計 27 件であった。事案発生後の平成 28 年度下半期では、小学校 47 件、中学校 22 件の計 69 件となり、上半期と比べて、2.5 倍の増加となった。
- ・平成 29 年度は小学校 169 件、中学校 121 件の計 290 件となり、平成 28 年度の 3 倍。平成 30 年度は小学校 466 件、中学校 210 件の計 676 件であり、平成 29 年度の 2.3 倍となっている。

(岡田市長)

- ・平成 27 年度の 23 件から比較すると、平成 30 年度の 676 件で約 30 倍となっている。学校現場では、今までとは桁違いの数を認知し、些細なことでも、いじめの可能性があると調査し、子どもと関わっているという証明であると考えており、このことは保護者の皆さまにも知っていただきたいと思う。
- ・評価検証委員会からも評価をいただいているようだが、認知件数がこれだけ増える中で、認知に至るプロセスを大切にしてほしいという意見もあった。1 年間ではあるが、集計結果などがあれば教えてほしい。

(小南教育長)

- ・認知のプロセスについては、教育委員会としても重要と考えている。令和元年 6 月末時点の集計であるが、以下のとおりとなっている。
- ・小学生では、アンケートによって発見したものが 16.2 パーセント。子ども本人からの訴えが 23.0 パーセント、別の子どもからの申出によるものが 8.1 パーセント、教員が発見したものが 15.9 パーセント。保護者が発見したものが 34.7 パーセントとなっている。
- ・中学生では、アンケートによって発見したものが 4.2 パーセント。子ども本人からの訴えが 48.4 パーセント、別の子どもからの申出によるものが 8.4 パーセント、教員が発見したものが 13.7 パーセント。保護者が発見したものが 22.1 パーセントとなっている。
- ・子どもからの訴えや、保護者からの訴えによって発見されるケースが多いが、子どもからの訴えについては、「心の相談アンケート」や「アセス」の結果をもとにした教育相談において聞き取りができたものもある。
- ・教育相談を継続して取り組んだ結果、子どもたちが教員に申し出しやすい環境ができつつあり、そのことが、保護者の声も届きやすい状況につながっているのではないかと評価している。

(岡田市長)

- ・各校において、アセスや教育相談には相当なマンパワーを投入していることと思う。取組を開始してから 1 年目の現時点では、まだ、ありとあらゆる手を尽くす段階であるが、分析をしながら取組に対する比重の置き方を考えてもらいたい。
- ・保護者の声から認知につながったものも多い。いじめ防止の最後の砦は保護者であるとも考えている。学校の手が届かない家庭の中での取組として、保護者の皆さまにお願いしたいことや発信していることなどはないか。

(小南教育長)

- ・保護者が子どもを見守り、変化を感じ取ることはとても大切だと考えている。

- ・家庭向けの啓発チラシやSOSチェックシートを作成して配付し、子どもにとって大切な自己有用感を高めるためにも、子どもと会話をする、認める、一緒に過ごす、ということをお願いしている。
- ・また、SOSのサインに気がついたら、TALKの原則、「T e l l (伝える)」「A s k (質問する)」「L i s t e n (話を聴く、気持ちを受け止める)」「K e e p s a f e (一人にしない、安全を確保する)」に沿って取り組んでもらいたいと伝えている。

(岡田市長)

- ・PTAも様々な活動を通じて発信していただいていると思う。学校・地域・家庭、総がかりで取り組むためにも手を尽くしてもらいたい。
- ・協同的探究学習を通じて、疎外感や劣等感を感じていた子どもも巻き込んで、一緒に授業ができるようになればいいと考えている。教育現場から、この手法がいじめ防止対策にもつながっていきそうだ、という実感のようなものはあるか。

(小南教育長)

- ・協同的探究学習については、学力向上をめざすとともに、子どもの自己肯定感を高め、子どもが学校生活を楽しんで送ることができるよう取り組んでいる。
- ・導入からまだ間もないため、全体的な効果としては見えていないところもあるが、平成30年度の学力向上推進委員や加古川市研究員、指導主事が助言を行った校内研究授業の授業者等からは、協同的探究学習に基づく授業づくりを行うことで、「小学1年生でも、根拠を基に、自分の考えを明確に発言できるようになってきた。」「意見の交流や議論が活発になり、子ども同士で話し合いが進むようになってきた。」「子どもたちから、『先生、今日は自分の考えをみんなと話し合ってる授業をするの?』という質問が出るようになってきた。」との感想や意見があった。
- ・パイロット校の校長の印象ではあるが、子どもたちの落ち着きが一年間で大きく変わり、授業がやりやすくなったということも聞いている。

(岡田市長)

- ・引き続き、協同的探究学習についても取り組んでもらいたい。
- ・SNS上の会話がいじめに発展してしまうような事例も報道されている。全国的な共通課題だと思うが、何か取組を検討されていることはあるか。

(小南教育長)

- ・一番大きな課題のひとつであると考えている。
- ・児童生徒のスマホ所持率は年々増加し、それに伴いLINE等のSNS上のいじめは増加傾向にある。
- ・本市では毎年、全小中学校で、児童生徒及びその保護者に対して、インターネット関係を担当する警察官や、民間のネットパトロール事業者を講師に招き、情報モラル教室を開催し、SNS上のトラブルの危険性やスマホ・携帯の正しい使用方法等を説明し、啓発チラシにより周知している。
- ・しかしながら、トラブルは発生しており、発見したときには既に拡散してしまっていることが

多く見られる。

- ・未然防止の取組も重要だが、トラブルの早期発見・早期対応できるようネットパトロール等の対策が必要であると考えている。

(岡田市長)

- ・SNSの普及により、家庭での会話も少なくなっているようにも感じている。先ほどもあったが、家庭の中でもいろいろなことを意識して、積極的に子どもと会話の場を持つことが大切と考えている。
- ・SNSトラブルも含めて、学校現場でも意識して取組をはじめていることを認識できた。
- ・これまでの説明や、評価検証委員会からの報告を受け、様々な取組を積極的に、かつ包括的に進めてもらっているという印象を受けている。
- ・一方で、個別の事案を耳にすることもゼロではない。多様なケースがある中で、対応が困難なケースもあると思う。スクールサポートチームもあるとはいえ、現場から風通し良く報告がなされる教育委員会であってほしいし、その際は、学校現場にどんと踏み込んでいくような相互関係を築き、連携しながら取組を進めてもらいたい。

(吉田委員)

- ・全国的にも中学生や高校生が、いじめを原因に命を絶ってしまったという報道がある。
- ・その中でも、教育委員会や学校の説明時には、「いじめを把握していない」、「いじめはなかった」とされていたものが、その後、第三者委員会の検証において「いじめが原因である」と報告されるケースがある。
- ・現在、本市では様々な取組を進めており、それらについて先ほど市長からコメントをいただいたところであるが、私は、定例教育委員会でも発言したとおり、教員がもっと子どもを見る目を養い、子どもにかかわる時間を作っていくことが重要であると考えている。
- ・教員の働き方改革の話もあるが、本市では、いじめの問題に対するスクールサポートチームの設置をはじめ、スクールアシスタントの配置や部活動の外部指導者の招へいなどに取り組む中で、教員の負担を少しでも減らそうとしている。
- ・これらの取組により、子どもたちと向き合う時間をもってもらい、子どもの様子や表情の小さな変化にも気づくことができる教員の育成が非常に大切であると考えている。
- ・先ほどの報告における「いじめをさせない取組」について、教育委員会として検討を重ね、体制の構築やマニュアルの作成など、手を尽くしていると考えている。
- ・最終的に、毎日の子もたちの様子を注意深く確認できるようにしていくことで、いじめの芽を摘んでいく、または、芽すら出てこないような状況を作るためにも、根本的な教員の資質向上という観点で考えていきたい。
- ・指導主事の学校訪問による、いじめ見逃しのチェック体制が機能したかは、100パーセント機能してこそ達成といえる。私としては、この部分にはまだまだ、改善の余地があるのではないかと考えている。
- ・教育長の報告において、小学校では、いじめ発見のきっかけのうち、教員が発見したものが15.9パーセントであり、それに対して保護者が発見したものが34.7パーセントと、保護者の数値が倍以上となっている。家庭での子どもの変化について、保護者から学校に伝えていただけることは大変良いことであり、子ども自身からの様々な申出もあるところだが、教員が子どもた

ちに寄り添い、見る目をしっかり持つということに踏み込んで取り組んでいくべきと考える。

(岡田市長)

- ・教員の皆さんが個々の生徒と向き合える時間を作ることができるような取組を考えていかなければいけない。
- ・国の方向性としても、今後、教育現場のICT化がますます進行し、情報端末を1人1台持つという時代もやってくると感じている。
- ・そのような中で軽減された時間については、子ども一人一人とじっくり話し合う機会を作るなど、教員に求められる子どもとの関わり方も、教育環境が変化する中で進化していくのではないかな。

(廣岡委員)

- ・5か年計画を進める中で、各学校、校長、教員、子どもの中に、いじめをなくしていこうという雰囲気や、自分の思いを訴えていこうという姿勢のようなものがアンケートにも表れてきている。これが5年後、文化になってほしい。
- ・また、今まで教員が勘や経験で発見してきたことを、様々なシステムを活用する中で、可視化できるようになり、わかりやすくなってきた。「自分の勘は間違ってた」など、新たな発見につながることも、一定の評価ができると考えている。
- ・指導主事については、以前に、かつての上司である校長や先輩に対しても遠慮することなく指導できるだけの力量をつけ、納得させてもらいたいと話したが、今後、さらに重要となることから、期待をしている。
- ・5か年計画など中期の計画においては、初めの1、2年目で雰囲気が生まれ、3年目で文化へと発展させようとする大事なときに、ルーティン化してしまうおそれがある。そのような時に大きな事が起こりがちであることから、この5年間くれぐれも気を引き締めて取り組みながら、起こったことに関しては恐れることなく公表し、生徒指導・生活指導の中でいじめ解消を進めてもらいたい。

(小南教育長)

- ・3年目を迎え、これからどう取り組むのか決めていく必要がある。
- ・引き続き「見逃しゼロ」を徹底し、広めていくことも重要であるが、教員の資質向上をはかりながら、子どもたちの居場所づくりを進めていくことも重要であると考えている。
- ・いじめは休み時間や昼休みに起こるケースが多いことから、子どもたちがストレスなく過ごせる環境をつくっていききたい。また、教員が子どものストレスを見抜くことができるようにするためにも、勤務時間の適正化などを図り、子どもと接する時間を増やすような、新しい取組を進めていく必要があると考えている。

(坂元委員)

- ・いじめに対しての取組の認知度も向上しており、いじめを発見する取組は進んでいると考える。引き続き、教員の資質向上に努め取り組むことに加え、学校が全ての子どもにとって楽しい場所であることが大切である。
- ・そのためにも、コミュニケーションを重要視してもらいたい。子ども同士や教員とのコミュニ

ケーションだけでなく、社会へ出て行く前の段階としてのコミュニケーションも大切であると考えている。コミュニケーションをとることが難しい子どもにも対応できるよう、「ありがとう運動」などに、教員の皆さんも具体的に取組んでもらいたい。

- ・いじめの発見だけでなく、防止の取組の推進にあたっては、いじめだけに焦点をおくのではなく、高いところをめざして、広い視野で取組んでもらいたい。

(播委員)

- ・昨今の報道では、いじめの加害者に対する風当たりも非常に厳しい状況がある。仕方がないという面もあるかもしれないが、加害者も将来のある子どもとして、支えられるよう指導していかなければならない。

(2) 加古川市立小学校・中学校の学校規模適正化及び適正配置について

- ・教育委員会事務局より説明

(岡田市長)

- ・基本方針については、パブリックコメント実施前に説明を受け、結果も聞かせてもらった。
- ・平成 29 年度にオープンミーティングを開催した後、教育委員会において「地域とともにある学校づくり協議会」や「地域協働推進部会」などでも議論いただき、モデルプランも提示するなど、かなり進めてもらっている。
- ・モデルプランも、それぞれの地域の実情と見通しに応じたものを提示されているので、重要なお意見が出てきていると考えている。
- ・まず両荘地区を検討していくか、についても説明があったが、両荘地区は少人数化の進行が特に早いことから、モデル的に取組んでいけたら、と考えている。
- ・私自身、平成 29 年度以降、市の北部地域でのオープンミーティングや地区別行政との懇談会では話題にしてきたが、非常に大きな話であることから、なかなかご意見をいただけないところだった。今後どのように進めていくのかがいよいよ大事になってきている。
- ・市長部局としても、教育委員会や学校現場に任せきりにしていい課題だとは全く考えておらず、それぞれの地域のまちづくりそのものだと認識している。
- ・最終的に小規模のまま存続させるのか、あわせていくのか、どちらにせよ、学校をどうするかを地域の皆さんが集まる中で考えることから、どうすればこの地域が活性化するのか、ということをも根本的に考え直すような、非常に有意義な機会になると考えている。
- ・学校とあわせて、その他の公共施設や、通学をはじめとする移動手段、地域に人をもっと呼び込むための取組、農業振興や工場誘致など、市長部局の各部署全般に関わるテーマだと考えていることから、ぜひ一緒に進めていきたいと考えている。
- ・今後の進め方も検討してもらっているが、機が熟したところで、できるだけ早いタイミングで教育長と一緒にオープンミーティングのような場を設けられたらと考えているので、相談しながら進めていきたい。

(吉田委員)

- ・この度策定した基本方針の長所は、教育委員会が全市的に刀を振り下ろすように「こんな風にします」と言うのではなく、それぞれの地域において「どういうあり方がいいのか考えてみてくださいね」と提案するようになってきているところであり、私はそこが非常に良いと考え承認した。
- ・オープンミーティング、地域とともにある学校づくり協議会、学校運営協議会、パブリックコメントなどでたくさんご意見をいただいている。
- ・どういう地域をつくっていくかということと、学校が適正規模になって、地域の学校はどうあるべきなのか、中学校はどうなるべきなのかということと一緒に考えられることは有意義なことである。
- ・一方で、まちづくりとして考えたときに、もうひとつ大きな問題があると考えている。
- ・例えば、公民館エリアと学校のユニットのエリアが一致していない地域があることである。
- ・公民館エリアでは、祭りを実施している。これはひとつのまちづくりの単位であると考え、学校の校区は別にあるという違和感が生じてしまう。
- ・公民館エリアと学校の校区とがどうあるべきなのかを、それぞれの地域で検討する中で、学校がどうあるべきなのか、ということは必然的に出てくる問題ではないかと考えている。
- ・ある学校の人数が減ってきたから、近隣地区の人を移動させて帳尻を合わせるという議論はナンセンスで、絶対にしてはならない。
- ・まちづくりのエリアがどのように形成されているのかを大事にしながら、エリアごとにめざしていく学校を中長期的に考えていただく中で、小中一貫校にしようとか、小学校だけは合併しようとか、自分たちの地域にふさわしい学校のあり方を模索するための方針であると理解している。
- ・言い換えれば、その問題に踏み込んでいかないと解決しにくいのではないかと考えている。

(岡田市長)

- ・地域のお祭りを訪問する中で、地域における縦横のつながりもとても大切だと感じている。
- ・今後、学校園支援ボランティアなども含め、地域の方にも学校運営にどんどん関わっていただくことになることから、地域のつながりを大事にして進めていきたいと考えている。

(2) その他

(岡田市長)

- ・東京オリンピックの1年前合宿として、8月13日からツバルの皆さんが加古川市内に滞在される中で、教育委員会の皆さんとも一緒に様々な取組を行うことができた。
- ・選手やコーチには、加古川東高校、加古川西高校の皆さんと一緒に練習をしたり、児童とふれ合ってもらったり、図書館では英語で絵本の読み聞かせなどにも取り組んでもらったりした。
- ・最終日のフェアウェルパーティーは非常に良い雰囲気になり、事前合宿を通じて、ツバルの皆さんと信頼関係を築くことができた、すばらしい機会になったと考えている。
- ・オリンピック・パラリンピックに向けた機運醸成については、教育委員会の皆さんの協力が欠かせないと考えているため、引き続きよろしくお願ひしたい。
- ・また、聖火リレーについても、ルートは年末まで公表されないようだが、沿道に集まる市民の皆さまや、関わってもらおう学生や子どもたちの一生の思い出になるようにしていきたいと考え

ているので、協力をお願いする。

(小南教育長)

- ・関連して、かこパラスポーツ王国について報告させていただく。
- ・8月25日の日曜日、12時50分から16時頃まで加古川市立総合体育館で実施した。参加人数は約350人。パラリンピック競技にもなっているシッティングバレーボール、車いすバスケットボール、ブラインドサッカー、ボッチャに加え、誰でもできる競技としてフライングディスク、卓球バレー、ふうせんバレーボールについて皆さんに体験いただいた。
- ・申込制であったシッティングバレーボールと車いすバスケットボールについては、それぞれ38名、35名の申込みがあり、全員が参加された。さらに、当日の希望者に加え、シッティングバレーボールは61名、車いすバスケットボールは43名とたくさんの方に体験していただいた。
- ・また、イベントアンバサダーとして小林祐梨子さんにも参加いただき、市長と一緒に全ての種目を体験していただいた。
- ・関連して、障がいのある方もスポーツを楽しめる施設へと改修するため、総合体育館のコミュニティアリーナの床改修を今年度末に実施する予定である。
- ・クッション性や安全性に優れている屋内スポーツ用シートを施工したコートに改修することにより、障がい者スポーツをはじめ、様々な用途で、幅広い世代の方に活用いただける施設になると考えている。

(岡田市長)

- ・かこパラスポーツ王国は、本当に充実したイベントだった。
- ・7種目体験したが、実際にやってみると、指導する方の技術に驚かされるなど、非常に貴重な経験となった。
- ・1回きりのイベントではないと期待している。ぜひ、様々な方にパラスポーツを知っていただくきっかけとしてもらいたい。

(吉田委員)

- ・先日、神戸新聞に加古川市の財政報告の記事が掲載された。
- ・その中で黒字が続いているが、来年度以降の見通しについては、例えば、中学校給食に係る施設建設など、大きな支出が見込まれるため不透明である、という書きぶりだった。
- ・教育委員会としては、児童クラブの全学年受入や、こども園化の推進に向けた建替え、空調設備の導入、そして、中学校給食の実施ということと並行して実現しようとしてきている。
- ・つまり、多額の予算を教育関係に向けてもらっているのも、子どもたちにとっても非常に手厚い財政投資になっているというような書き方にならなかったのかと考えてしまう。
- ・教育委員会に対する市長の思いや、加古川市の財政の方向性は、ますます教育に力を入れていくんだと発信していただき、記事にしてもらえたらよかったですと感じている。

○ 閉 会 午後2時50分